

最高文芸としての正統政治学

——後・量子論的方法論の1研究——

池
田
栄

目次

1. 緒論 (孔子の音楽論とカイザーリンのアジア的世界観)
2. 本論 (『最高文芸』としての正統政治学)

Contents

1. Introduction (Confucius's Musicology and Keyserling's Asiatic View of Nature and Man)
2. Orthodox Political Science as the Architectionic

Der ganze Osten betrachtet den Menschen als Bestandteil der Natur und verhält sich dementsprechend, während es für uns zunächst bezeichnend ist, dass wir die Gliedschaft verleugnen. Ohne Zweifel ist seine Grundanschauung die tiefere. Nur aus asiatischem Weltgefühl kann eine allumfassende, nichts verleugnende Religion und Philosophie hervorgehen, es allein vermaglich im Prinzip eine vollkommene soziale Organization. — Hermann Keyserling

(訳文) 全東洋は人間を自然の構成部分とみなしてそれに調和的な態度に出るに反し、人間が自然の要素であることを否認するのが、われわれの第1の特色である。疑いもなく全東洋の根本見解は、いさう深いものである。フジブ的な世界観からのみすべてを包括し、なにものをも否認しない一体的なる宗教と哲学が出現することができ、この一体的なるものだけが1つの完全な社会組織を原則的に可能ならしめる。

——ノーマン・カイザーリン

始作翕如也。従之純如也。皦如也。繹如也。以成。

——論語 八佾第三

(訓読) 始め作(な)すに翕如(キョウジヨ)たり。之(これ)を従(はな)ては純如たり。皦如(キョウジヨ)たり。繹如(エキジヨ)たり。以(もつ)て成るべ。

——八佾(ハチイシ)第三

(英訳) At the commencement of the piece, all parts should sound together. As it proceeds, they should be in harmony, severally distinct and following without break and thus on to the conclusion, (Version by J. Legge, D. D.)

——Confucius

(1) H. Keyserling, Das Reisetagebuch eines Philosophen, II, S. 623.

(2) J. Legge, Confucian Analects, Book III. Pā Yih.

1 緒 論

以下に論ずるものは最高文芸 (the architectonic, the master-art) としての正統政治学 (orthodox political science) であり、政治学に関する後・量子論的方法論の研究 (a study of the post-quantum-theory methodology) である。この正統 (正統的、orthodox) とは非正統 (非正統的、heterodox) に対するものであり、伝統的 (traditional, conventional) に対ひ正統 (正統的、old-fashioned, time-honoured) の一種であり、従ってそれは伝統的でも何でも陳腐な (out-of-date, old-fashioned, time-worn) なることを意味しない。つまり非正統かならずしも不当ではなく、newfangled (新しくつくられた) ともまた up-to-date も存する。つまり正統の意味に従って正統政治学は弁証法的 (dialectical) に対ひ形式論理的 (of formal logic) であり、現実的理想主義 (realistic idealism) であり、この現実的理想主義を政治的正当主義 (political legitimism) とする。

むしろ最高文芸を主張する学として正統政治学のほか近代的なる弁証法政治学があり、「人生は短かく、文芸は長く」(ho bíos brachús, hé de tékhnē makrḗh) とするギリシヤ古代の格言を近代科学の精英たる量子論によって裏書きしつつ主張するマルクス主義と実存主義の弁証法政治学の近代哲学的深遠さに敬意を表することができる。それだからといって形式論理のうえに立つ政治学は哲学的根柢なき現実科学に過ぎないか、それともせいぜいのところ「前・量子論的」(量子論以前の、pre-quantum-theory) と評せられる法実証主義の主張であって、理想主義的主張を欠くと考え、従って形式論理政治学のすべては最高文芸の観念をまったく欠く浅薄なるものであるとすれば、それは弁証法的偏見といわねばならないし、本論の主眼点は、「後・量子論的」(量子論以後的) 主張として、この「原

・量子論的」(proto-q.-th.) 偏見を打破するに努む。

(1) Hippokraties, Aphorismi, I, 1. 原キリシヤ語文は *vita brevis, ars longa* と訳され、また *Life is short, art is long* と訳される。しかしこの場合の英語の *art* は古語であり、現代語の *art and science* に当る。それ以上の英訳文の後半を「芸術は長い」と訳しているのは誤訳であり、正しくは「文芸は長い」と訳すべきである。この「文芸」とは学問と芸術の両者を含んだ概念であり、「学芸」の訳語を避けたのは「学芸」はしばしば「学芸会」の「学芸」すなわち学校での学習と技芸を意味するからである。出隆(いでたかし)氏はこの *tekne* または *ars* を「学問技術」と訳しよう。

ここにいう最高文芸としての正統政治学の意味を以上のごとく考えるときは、本論に入るに先立ち孔子の音楽論とカイザーリンのアジア的世界観を説明するを便とする。この両哲人の見解はこの緒論の冒頭に記している。

孔子の音楽論

孔子 (Confucius, 前552—前479年) は満68歳にして故国たる魯(ロ、Lu)に帰り、その後、没するまで数年のあいだ、野(ヤ)にあって詩経・書経を整理し、易の序を書き、礼楽を整え、また弟子たちをよく教え導いたが、この礼楽についてはいつの日か孔子は「天下道あれば、則(すなわ)ち礼楽征伐天子より出づ、」(天下有道、則礼楽征伐天子出)と、また「礼楽興らざれば、則ち刑罰中(あた)らず、」(礼楽不興、則刑罰不中、)と教えた。魯に帰った孔子はその国の楽長に対し、雅楽の演奏原理について、すでに記したごとく「始め作すに……」と教えた。この教訓の意味について江文也氏はつぎのごとく記している。

楽曲を始める前には、よく各楽器の調子をあわせて、一斉に始めても同一音に聞えるようにし、全奏(トクッテイ)にあっては不協和な音を避けて同一音に聞えるようにし、各楽器の独奏(ソロ)では、その音色(ねいろ)がはっきりと聞き取れるようにして、演奏中では音の流れを絶えないようにして、各楽器を配置すべきである、という。これで始めて1楽曲の演奏が終れる

最高文芸としての正統政治学

五三

ものである、と云う。

この時の孔子の音楽的才能は、実に専門家のそれをしのいでいた。(中略) 一体、専門的な音楽家というものは、時代のいかにとわがず、いつもその音楽という限られたちいさい世界でしか、事物を考えたり、のぞいたりしないものである。¹⁾

(1) 江文也、上代支那正統考—孔子の音楽論—257頁。(当用漢字、新かなづかい訂正)

ここにいう全奏とは管絃楽たる一種の合奏協奏曲 (concerto grosso, pl. concerti grossi) に当たる tutti 部であり、独奏とはその solo 部である。ソロ部においては独奏なしでは管絃樂的伴奏 (an orchestral accompaniment) を伴う。合奏協奏曲は独奏協奏曲などと区別せられる。

この音楽論にその一端が示された孔子の最高文芸観はアジア的世界観のうま創造的進化説に属するものであり、この種のアジア的世界観において芸術は美しい大自然の模倣であり、従って狭義の写実主義 (realism) であり、アジア的世界観を代表する。シナ古代の雅楽は、まず、その旋律的音程 (melodie interval) にていづつ「五聲」、インテ古代の22不平均律とともにヘブライ=ゲルマン的世界観 (後に説明) に見る12平均律 (twelve-fold even temperament) より細分された音階を有することによって大自然美を模倣するに適合している。¹⁾ そのうち琴 (キン、ch'in)——絃楽器 (stringed instruments) の一種で7絃——の絃から生ずる音は笙 (シ、ウ、shêng) とか簫 (シ、ウ、shao) などの管楽器 (wind instruments) や磬 (ク、ウ、ching) や鼓 (コ、ウ、ku) の打楽器 (percussion instruments) による変化に富み、その出現後、琴は雅樂の音律の中心となった。²⁾

(1) 英國に生れた人種音楽學 (ethno-musicology) やその後ドイツに發展した比較音楽學 (vergleichende Musikwissenschaft) は雅樂のこの長所を認めてゐるやうである。

(2) 江文也、上代支那正統考、204頁参照。

つぎに和声（ワセイ、カセイ）的音程（Harmonious interval）に関して云えば、ヘブライニゲルマン的な西洋音楽においては西洋的和声——すなわち不協和音（dissonance）ニ不協和音程（dissonant interval）による緊張感と協和音（consonance）ニ協和音程（consonant int.）への解決による安定感（シ緩）とを巧みに配合する——を特色とするに對し、広く雅楽は大自然を模倣するがゆえに、その合奏協奏曲において協和音のみを尊び、この協和音によって大自然の、目に見る picturesque views にもよく調和することとなり、明治天皇のお歌たる

（虫声非一）秋の野のちぐさの花のいろいろを声にうつして虫ぞなくなる²⁾

こそはこの代表的アジア的世界観における音楽観であり、この音楽観は樂記のうちに「樂者天地之和也」とあり、音楽は天地間の調和原理を表現したものであるとすることに當る。

(1) 自著、英國刑事公民政治史序説、付録、17頁。

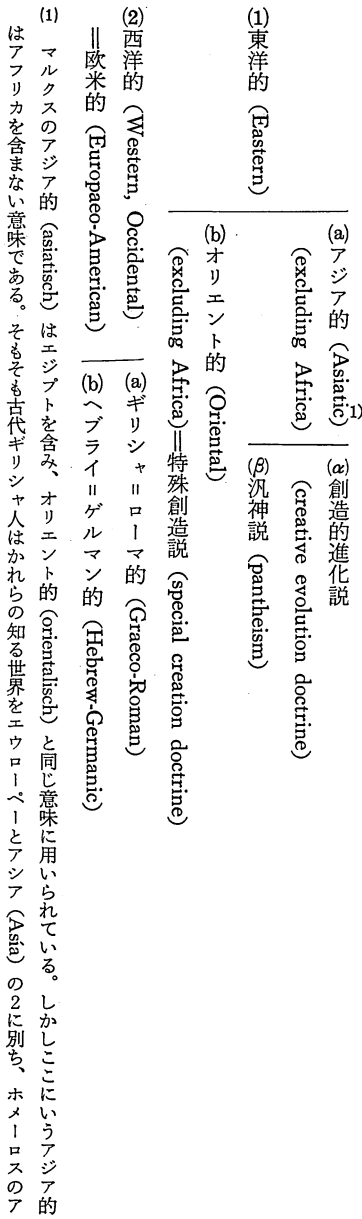
(2) (明治37年)。他のお歌に(草花) 秋の野のちぐさの花にくらぶれば染めなす色は限ありけり(明治37年)とある。

しかしここに注意すべきことは東洋雅楽の合奏協奏曲が広義のモノフォニー(monophony、単旋律音楽、単音楽)——広義のホモフォニー(homophony、同音音楽、同音音楽)——の範囲にとどまることであり、従って狭義のモノフォニーと狭義のホモフォニーを含む¹⁾も、ポリフォニー(polyphony、多声音楽、多音音楽、複音楽)を含まず、ただ舞樂の序におけるカノン(canon)風の奏樂によりポリフォニーをおわすようである。それは大自然界の音楽の模倣にはむしろポリフォニー中の対位法(the art of counterpoint)を用い、そのいわゆる協和音程を利用するを純理論的には理想とするも、この意味での対位法利用は平凡人(中人、凡夫)である人間にとっていかなる芸能(artistical acquirments)³⁾上の天才(men of talent)にとつてもその音楽的芸能(musical acquirments)から云って不可能の

ことに属すると考えられたからの結果であり、この考えは当然であらう。思うに「秋の野のちぐさの花のいろいろを」完全に「声にうつし」うるのはひとり神のみわざのみであらう。武鳥羽衣も「聞けやひとびとおもしろき」この天然の音楽を／調べ自在に弾(ひ)き給ふ／神のおん手の尊(たふと)「しゃ」と詠じている。

- (1) 主旋律 (the principal melody) たるソロ伴奏 (accompaniment) を主とす。裝飾的 heterophony を伴うたもの。ホモニキーのちも独唱に伴奏に伴うものを狭義の monody と称せしむべき。
- (2) 対位法は英国現代の評論家・小説家として有名なハクスリー (A. L. Huxley, 1894-) が文学に用いて成功しているようであり、1928年に「Point Counter Point」(わが国では「恋愛対位法」とも訳せしむる) を出した。この人は英国の世界的科学者ハクスリーの孫。
- (3) acquisitions, accomplishments は広義であらう intelligence, intellectual acquisitions (知能) をも含む。狭義では芸能のみを指すが、men of talent の意味から考へるべし。狭義は適切であらう。自作、英国刑事公民政治史序説、付録、19頁参照。

以上のごとく孔子の音楽論を説明したわたくしは次にカイザーリンのアジア的世界観を述べねばならない。そのためにもここには世界観をまず次のごとく別けて考える。



ポロへの賛歌においてエウローペー (Europe) とは、プロポネソス (Peloponnesos) 半島とエーゲ海諸島のみを指し、一般的に「ヨーロッパ」なる語は次第にアフリカの北部をも含むこととなったが、ヘーロドトス (Herodotos) は既知のアフリカをリベュエー (Libue) の名によつてアシアより除いた。

うへのアジア的世界観は汎神説的宗教と自然尊重を特色とし、そこに出現する哲学たる宗教——eind Religion und Philosophie——は最高文芸をなす。しかるに礼 (savoir-vivre) は一般的に音楽その他の芸術と深い関係を有するから、礼は哲学的宗教の補充として非常なる発達をなしている。これに反しオリエン特的世界観においては特殊創造説 (special creation theory) と自然征服を特徴とし、この宗教的世界観には最高文芸の観念が存しないのみならず、その自然征服観から芸術が否定される。従つて礼の発達を見ない。うへのアジア的またはオリエン特的はともにアフリカを含まない意味で地域的には同じく、しかもかかる使い別けをするのはカイザーリンの「アジア的」(asiatisch) という語と「オリエン特的専制」(orientalischer Despotismus) を連想してのゆえである。

つぎにうへのアジア的世界観はさらに詳しく説明するに、ひとしく汎神説的宗教を認めるとは云え、(α)創造的進化説と(β)汎神説にわかれ、(α)創造的進化説はアリストテレスの場合のごとき明白さには出ていないが、仏教の para-gati 観¹⁾にうかがわれ、また孔子も釈迦も個々の人間の衝動を離れては人間の本質を理解しえないことを教えられたか²⁾ら、孔子にもこの種の進化論が恐らく存したと思われる。この進化論に基づき大自然の美を尊び、また人間の自然の本性たる正義 (dikaios) とか愛を仁義とか王法の名に尊重して會議政治を主張する。この進化論的立場においては形式論理が前提とせられ、それをインドでは因明 (Hetu-vidya) という。またこの立場はうへの自然尊重から、写実主義 (Realism) の芸術を要求し、かくてこの立場の哲学たる宗教は最高文芸の資格を有している。この写実主義の音

案についてはすでに述べた。つぎに写実主義の美術について述べるに、それは写実主義の延長とも見るべき抽象美術 (abstract art) を含んでいることは西洋における写実主義美術の場合に通じる。およそ抽象美術には (1) 大自然の姿を素材とした抽象、すなわち l'abstraction と (2) 大自然の姿と絶縁した抽象、すなわち l'abstrait = complete abstraction とあり、この (1) は写実主義の延長であり、それはさらに (a) 大自然の美を素材とするものと (b) 大自然の美と醜とを区別しないとともに素材とするものの 2 に別たれ、そのうち (a) 大自然の美を素材とするものはうへの創造的進化論の要求するものであり、それはさらに (α) 象徴主義 (symbolism) と (β) surréalisme にわかれたる。一般にシュルレアリスムは精神分析学によって説明しうるが、うへの創造的進化論の場合はユング (Jung) のそれによって説明しえられる。

(1) 自著、アリストテレスの進化論的宗教、31頁、101頁。

(2) 自著、前掲、2頁。

(3) 写実主義の芸術。ここに實在 (実体、being, reality) という語を現象に対してでなく、觀念 (Idea) — 人間の意識内容 — に対して用いるとき芸術 (art) とは實在の模倣による美の表現であり、プラトーン以来この意味で芸術は自然の低位に立つと考えられる。これが写実主義の芸術であり、印象主義 (impressionism) を含む。従つてこの芸術はその延長として實在を指示物とする象徴をも認める。しかしオスカ・ワイルド (Oscar Wilde) の *l'art pour l'art*、唯美主義 (aesthetism) を主張するものは、反対に自然が芸術の模倣であるとす。

(4) 象徴主義者はそれが實在 (実体) 的 — 観念的に対する — 指示物なくして意義があると称する。しかし本文の場合の象徴主義における象徴は象徴主義者のそれとは区別される。思うに、広い意味の記号 (sign) はかならず指示物 (referent) を示すものであり、それに (1) 作爲的記号、すなわち象徴 (symbols) と (2) 自然的記号 (狭義の記号) すなわち徴候 (signals, symptoms) または徴表 (symptoms) の 2 種類があり、本文の場合の象徴は實在的な指示物としての大自然の美を示すものである。

つぎにアジア的世界観のうち (β) 汎神説はウパニシャッド哲学化した諸行無常の仏教経典を超越する祖師禪にうかがわれ、人間自然の本性たる善 (正義・愛)・悪を実存主義弁証法において認めるが、この立場においては時に超国家

主義的専制主義¹⁾が認められ、また逆に時に極端な享樂的個人主義が認められる。この立場から1種の写実主義芸術が要求され、かくてこの立場の哲学たる宗教も最高学芸たることを主張する。かのカイザーリンの主張する „eine Religion und Philosophie“ とはこの意味のアジア的汎神説的最高文芸を指すものである。しかしこのカイザーリンの主張はこれを既述のアジア的なる創造的進化説について言うときも真に適切であると言いうる。わたくしはこの後の意味を主張するがゆえにカイザーリンのこの語句を冒頭に引用する。

(1) 田辺元博士、國家の道義性(中央公論、昭和16年秋季特大号所載)。原著、アリストテレス進化論的宗教、94頁、95頁に批判。

しからばうえのアジア的汎神説の要求する芸術はいかん。まずこれを美術に見るに、写実主義としてそれは、古來、大自然の美と區別される醜——形式論理の立場にての醜——においてその弁証法上の美を主張するゆえに、「幽玄」、「わび」、「さび」の名に monotonous なツヤ消しの美を¹⁾尊び、また寒山、拾得(カンザン、ジットク)やねむり布袋(ホテイ)の珍姿を喜ぶ²⁾。写実主義の延長たる抽象美術として、すなわち Abstraction (前出)として、それは近代におつて西洋的な cubism や 1種の surrealisme を尊び³⁾、この場合のシュルレアリスムはユンででなくアドラー(Adler) またはフロイト(Freud) で説明しよう。

(1) 原著、英國刑事公民政治史序説、付録17頁、27頁。なお世阿弥(セアミ)のいう「幽玄」は能楽で尊ぶものであるが、それは「わび」または「さび」の意味の「幽玄」と區別せられる。

(2) 評論家望月信成は約35年前の「白紙の画賛」というわが國の作品は白紙に何もかかずただ一隅に小さく暑い夏に涼しい滝という意味が文字でかかれていたが、これはイタリーのフォンターナが informal として白紙を小刀で2、3度切っただけの作品を出したよりも進んだ画境を示している(記している(読売、昭和8、8、23、随想)。日本の上の絵は日本の実存主義と結合する Abstraction であるかも知れない)。

(3) Picasso の cubism (1907-1917)、1913年「ギターを持つ男」ピカソのシュルレアリスム(1927)。ピカソのこの種作品のうち、ニラスケス(Velázquez) の Las Meninas (Maid of Honour、宮廷の侍女たち)から描いたもの(1957)は、ドレーパーに「マンネー」(Manet) の La

Déjeuner sur l'Herbe (Meal on the Grass, 草の上の食事) から描いたもの (1961) はフロイトによって説明しよう。うえのベラスケスの絵は印象派風であり、マネーはうえの作品などにより、モネー、ルノアール、ドゥガールとともに印象主義の大家である。マネーのこの絵は落選者展覧会 (Salon des Refusés) に出陳されたのでまた有名である。印象主義はローカル・カラー (固有色) を否定する。

なおうえの立場の禪をある種の軽音楽と結合せしめる企てが近代西洋の禪信奉者などの間に存する。ひろく軽音楽 (light music) は重音楽 (serious music) —— 芸術的企図のもとに創作される —— と区別される単なる娯楽的のものであり、しかもそれが naive な音楽でないことは明白であるが、禪と結合して主張される軽音楽はナイーブでないこともた sophisticated music であり、およそいかなる哲学とも結合しえないものである。一方、ソ連では1932年いらい社会主義リアリズム (socialist realism) を文学および芸術の指導理念とし、1955年の「雪どけ」による反動、とくに音楽・絵画における反動いらい、この種の軽音楽に対してはある種の抽象絵画に対してと同じく、きびしい非難とある種の断崖¹⁾が加えられ、「退廃的なジャズ」、「不協和音を喜ぶ馬鹿者たち」というはげしい批判が存した、しかもこの道義的批判だけは自由主義国家の心ある識者たちもこぞって共鳴するところであろう。

(1) ソ連では twist と軽音楽の併用を禁止していた。twist は「社交ダンスや下記のダンス (dancing) とともに、舞踊ではなく、単なる娯楽たるダンスである。それとともにそれは扇情的かつだれもおどれるうえごんな曲にも向く。従ってそれはサンリの求愛ダンスを連想せしめる。hula-hula は hip と手の動きに重点があり、Tahiti の女のオドリは waist と hip の動きに重点がある。rock-a-billy は rock-and-roll と hillbilly の結合したもので、the Beatles は英国のロカビリー・カルテット。このほか、surfing」。

なおうえの実存主義弁証法はキエアケゴアによって「質的弁証法」または「あれかこれか」の弁証法と言われ、これに対してかれのいわゆる「量的弁証法」または「あれもこれも」の弁証法が区別される。この「あれもこれも」の弁証法はヘーゲルの観念論的弁証法も含むが、現在において代表者なのはマルクス主義の唯物弁証法であり、ソ連はこの唯物弁証法による哲学を1932年いらい最高文芸として既述のごとく社会主義リアリズムの芸術を要求してい

た。この芸術観に従えば次のごとくなる。弁証法的歴史発展を表現する社会主義リアリズムのみが真の動の芸術であり、真のリアリズム（写真主義）である。形式論理に立つ、他のすべての芸術について言えば、動を描くと自称する印象主義の絵画すら現在の1種の動のみを描いてその他の動を描かず、従ってそれは真の動の芸術ではない。

以上においてアジアの世界観における最高文芸としての哲学的宗教を、創造的進化説と汎神説の両者について論じた。しかるに礼——これを西洋風と言えば *savoir-vivre* の意味の *l'étiquette* ——は音楽その他の芸術と深い関係を有するから、アジア的世界観の場合、礼は哲学的宗教の補充としての重要な意義を有し、この意義によって非常な発達をしている。孔子はこの意義について「中行（チュウコウ）を得てこれに与（くみ）せずんば、必ずや狂狷（——ケン）か。狂者は進みて取り、狷者は為さざるところ有るなり。」（不得中行而与之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不為也、）^(子路第十三) と言って、礼と仁義と両立しないときは、むしろ仁義をとるべきであると称した。この考えは謡曲「蟬丸」（せみまる）において「松虫鈴虫きりぎりすの鳴くや夕陰の山科（やましな）の里人（さとびと）もとがむなよ。狂女なれど心は清滝川（きよたきがわ）と知るべし、」とあるに当ると考えうるし、またシェイクスピアが礼と正義の関係について考えるものに当ると思いうる。シェイクスピア作「ハムレット」（Hamlet, Prince of Denmark）には英国人の“madness”をたたえる意味において墓掘りとこのデンマーク王子との対話を書いているが、上述のキエアケゴアの質的弁証法に当る考えが古来つよいデンマークでは礼はすでにシェイクスピアの当時によく行われていたのであり、この文豪がこの礼あるデンマーク人を非礼（rudeness）の英国人に対比してうへの対話を書いているところに、かれが非礼なるハムレットの正義を通じて何を言わんとするかがうかがわれる。寿岳文章氏もイギリスには「健康な狂気」があると云っている。³⁾

(1) 能楽で尊ぶ「幽玄」「しぶし」とは世阿弥の「幽玄」「しぶし」であり(本誌59頁注(1))、「わび」「さび」の意味の「幽玄」「しぶし」、明治の「しぶし」ではない。この世阿弥の「幽玄」の美は文化的茶道や写実主義の新旧華道(印象主義の生花(いけばな、セйка)を含む)と両立する。現代の文化的茶道は禪的な1種の行持戒(karma-sila)——行持戒は止持戒(akarya-sila)と区別される——たる、昔風の、禪僧珠光の流をくむ「わび」的茶道と区別される。

(2) おそよ広義のエティケットには積極的なもの、すなわち礼—savoir-vivre—と消極的なもの、すなわち good manners があるが、フランスやデンマークではフランス的な sociabilité の観念(自著、英国刑事公民政治史序説、付録、37頁——)から savoir-vivre がよく行われている。又、英国では good manners が行われる程度であり、礼はフランスなどに比してはなほた少く、その good manners は social practices at the time of the embarrassment in the presence of others すなわち人前での遠慮であり、消極的なものである。例えば、晩食のあと客は総括的に礼をいう慣習がフランスやデンマークに存し、『J'ai passé une très bonne soirée』以前のデンマーク語は「Tak for mad」であるがこのデンマーク語に当る英語は存しなかつた(Elis Bredsdorff, Danish, p. 184)。むむ、英国におつても識者はマイルランド起源の諺である「Fair and softly go far in a day」を用いて礼の必要を知つた、その medical etiquette や legal et の名にて医者や弁護士の間、の仁義が重んぜられるが、礼はフランスなどほどよく行われなかつた。

一方において、今日の日本の団地の若マダムたちがプライバシーの尊重から育児その他についての他人の忠告と助言を怒るのはどこか狂っているという意見が、関西の団地を例にして読売新聞の昭和39年8月20日の諸版に出て、団地研究会の川口勇関大教授もかかる忠告や助言は決してプライバシーの侵害ではない旨を云っている。しかし川口教授の見解は正しく、privacy を尊重する英国人もまた「忠告権」(right to warn) は各人の有する道義上の権利であり、なにびとそその privacy についても他人の忠告に耳を借すが good manners であると考えられる。それは英国人が good manners を正義と愛と無関係に考えずそれらの補充と考えるからである。

(3) 寿岳文章、この英国人(アテネ文庫47)、3頁。

つぎにオリエンタル的世界観について既に概説したところをより詳しく述べるに、特殊創造説とその変形たる超絶的流出説(doctrine of transcendent emanation)に基く自然征服(Bezwingen der Natur, Beherrschung der N, 自然支配)観は大自然の征服と人間の自然の本性を一切克服することを目的とする。特殊創造説とは一時的に造物主が一切を創造したという考えであり、インドのリグ・ヴェーダ(Rg-veda)に認める造物主としての Prajapati の考

えは別として、古代シナにおける儒教的俗信仰、ユダヤのエホバ信仰はこれであり、うえの超絶的流出説はインド神話における原人 (Prusa) よりの流出の考えである。うえの特殊創造説のばあいは常にそれと陽に結んで自然征服観が出ているが、流出説の場合は必ずしもそうでなく、サガラ (Sagara) 王の六十千王子 (Sasūh, putra-sahaarāh) のプルシャが昇天する神話には流出説と自然征服の陽なる結びつきがうかがわれるが、いわゆる小乗仏教やいわゆる大乘の諸行無常観¹⁾はうえの流出説と陰に結合しているが、サンスクリット法華経地湧菩薩品はこの結合を陰喩もて非難している²⁾。

(1) 自著、アリストテレースの進化論的宗教、94頁参照。

(2) サンスクリット法華経のこの意味の symbolism はわが富永半次郎氏によって発見され、氏は梵文の六十千の六十をもつて「六十 tantra」の陰喩であると解している (東京帝大仏教青年会編、仏教思想講座1、富永氏、釈尊の仏教 188頁)。

うえに見る特殊創造説と自然征服の陽なる結合には造物主の創造時における意思を汚れたる現世に知らしめるため神の代理人として国王の専制が認められる。世にいわゆる「オリエント的専制」は多くのばあいにこの意味の専制を指している。かかる宗教的思想のもとには実定法は発達しない。つぎにうえの流出説と自然征服の陰なる結合からはうえのごときオリエント的専制の考えは必ずしも生れず、いわゆる小乗仏教は自己身体を灰滅するを最高の理想としている。

なおオリエント的世界観においてはうえの自然征服観から例外的象徴のほかは芸術を含めて一切の娯楽を否定する。「アポロ仏」(Le Bouddha apollinien) 出現までインドに仏像が出現しなかったのはそのためである。とは云え、今までの特殊創造説はかならずしも自然征服観とそれに基づく芸術否定となるものではない。例えば、プラトーンは芸術をもってイデアの世界の模倣の術となし、この世界を直接に模倣する音楽のみを真の芸術となし、自然界はイデアの

世界の不完全な模倣であるから、美術はかかる模倣の意味で低級の芸術であるとし、更に實在の意識なく現象のみを写す詩人・絵かきを国家より追放すべきことを主張した。このプラトーンは特殊創造説を有した¹⁾。しかしオリエン特的世界観の特殊創造説からはプラトーンの芸術尊重は発生しなかつた。

(1) 自著、アリストテレスの進化論的宗教、5—6頁。

以上において東洋的世界観を述べた。つぎに西洋（欧米）的世界観をうかがうに、まずその(a)ギリシャ・ローマ的世界観を見る。これは古代ギリシャ、古代ローマおよび現代英国における世界観であり、そこにはうへの創造的進歩説は存するも、汎神説は存しない。そこでこの創造的進歩説をうかがうに、それはアリストテレスによって代表され、広い意味でのこの進歩説とその最高文芸観についてはすでにアジア的世界観の創造的進歩説について述べたところを援用しうるも、以下少しもこれを詳論する。

アリストテレスは、別に論じるところ¹⁾、正義と愛について述べたが、それは形式論理学 (Formal Logic) —— 形而上学的論理学たる弁証法 (Dialectic) に対する意味 —— を前提とするものであり、アリストテレスこそ西洋における形式論理学の樹立者であつた。そもそもソクラテースが概念的認識 (真理) は *dialegesthai* (対話、問答) から出た語の *dialektikēh* (対話法、弁証法) で示される方法、言いかえれば *maieutikēh* (産婆術、*maia* || 産婆) によって婦納的に得られるとした。この *dialektikēh* は 1人相手に行われるから、多数相手の言論技術たる *rhetorikēh* と區別される。このソクラテースの見解に対しプラトーンはこの種の婦納法を補うにプラトーンの演エキ法をもつて、この2方法を *dialektikēh* と称した。これに対しアリストテレスはかかるプラトーンの *dialektikēh* は真の学問的方法たる形式論理学の婦納法・演エキ法の準備たるに過ぎないとして形式論理学を西洋において樹立するに至つた。

(1) 自著、アリストテレスの進化論的宗教、29頁、59頁。自著、英国刑事公民政治史序説、217頁。

なおアリストテレスは、プラトーンとともに芸術を「模倣の術」(τέχνη μίμησις τέχνη, mimesis = imitation)と称したが、アリストテレスの「模倣」(μίμησις)とは自然美の模倣であり、このばあい自然の純化すなわち自然の欠点を補うことが目的とせられた。かかるアリストテレス的芸術観に基づくギリシャ芸術の具体的作品については別に論及する。

また英国についてはアジアの世界観に論述したほどの礼の発達を見ないが、それについてはすでに論述した。

最後に西洋の世界観のうち(b)ヘブライゲルマン的なものはオリエンタ的なエホバ信仰に基因するキリスト教的特殊創造説に関するものである。これについてはオリエンタ的世界観について述べたものを援用しうる。西洋における君主専制は、北欧の場合を除き、多くこれに基づく。ただし、オリエンタ的世界観との差として、ヘブライゲルマン的なもの場合は、特殊創造説とそれに基づく自然征服観が芸術否定に陥らないことであり、この点でプラトーンの場合(既述)に通じる。

2 本 論

以上において孔子の音楽論とカイザーリンのアジア観について述べ、それに関連してアリストテレス説を中心にギリシャローマ的世界観に論及した。それはむしろ最高文芸としての正統政治学の何たるやについて、上述の諸論説に向って対位的的(contrapuntal)説明を与えようとするものである。しからばこの伝統的政治学のこの考えが何故に正統的と考えられるか。一言もって言えば、この考えがすでに緒諸の冒頭に記したごとく「後・量子論的」と考え

られるためであり、このことを説明するには、量子論¹⁾の発達と関連して社会科学の発達を論述しなければならぬ。

(1) 量子論 (the quantum theory) とは理論物理学において、原子世界の物理法則を究明するものであり、原子よりも「微視的」(microscopic) (マクロ経済学の代表たるケインズ理論というべき) macroscopic に対するものではない) 元素粒子 (elementary particles) の個々またはその集りを取扱ひ、素粒子を量の粒子と見る理論である。この理論によりハイゼンベルクは機械論を否定し、ボーアは補足性原理を主張した。学者あるいは論じて曰く、今日の物性論・電子工学などは量子論と関係するも、原子を越える巨視的世界については古典物理学が解析学(微分・積分)をも用いて天体その他の運動を十分に調べ、それが天文学・土木工学・建築工学・機械工学 (Gybernetics を含む) その他の応用科学の基礎たりうる資格を十分もっており、これら応用科学は抽象数学を用いる量子論から超然たりうるから、モルの行動のごとき巨視的世界を対象とする政治学と量子論はまったく関係がないであろうという。しかし人間行動に関するかぎり、ボーアの認め、知識の補足関係は存する。しかし後述のごとくハンクル教授に従ってミンコフスキ世界の外にある実在を認めるときは量子論は正統政治学と大いなる関係を持っている。

この量子論が今世紀の初頭に出現するに至るまでは、理論物理学は古典理論 (the classic theory) の時代であり、この古典物理学は物理学のいわゆる「巨視的な」(macroscopic) 世界、すなわちわれわれの感覚に直接ふれるような大きさの世界の物理法則を究明し、それ以下の大きさの世界たる「微視的」世界については、それはせいぜい分子世界を究明するにとどまり、分子は原子より構成せられるも原子はその名 atoms の語源的に意味することく分割しえず (atomein) 究極的粒子 (ultimate particles) であるとせられた。うえの古典物理学の方法を徹底的に生物学に適用してパヴロフ (Pavlov) の生理学的原理たる条件反射 (uslovnyj refleks) が主張され、1910年台に米国のウォトソン (Watson) はこの原理をそのまま心理学に適用して行動主義 (behaviourism) の心理学を提唱するに至ったが、従つてこの行動主義心理学は分子的行動 (molecular behaviour) を対象として、意識なき心理学 (psychology without consciousness) である。これに比して後に出現する新行動主義 (neo-behaviourism) の心理学はモルの行動 (molar behaviour) を対象とし、意識ある心理学 (p. with c.) である。一方においてヴェーラー (Wöhler) が1828

年に尿素合成に成功して、ヴエーラーの科学的業績 (scientific achievements) と並行する長寿による名声もあつて、この合成を理由として有機物も無機物と同じ原理に支配せられる可能性がひろく学界に承認せられた。以上のごとき物理学の発展とそれに伴う生化学 (biochemistry) と行動主義心理学の成立などにより、すでにカントの不可知論とヘーゲルの観念論の出現しているにかかわらず、第19世紀末から1910年台にかけて、理論物理学者の間には素朴实在論を前提として機械論的因果 (mechanical causality) を主張する声が高く、その間にはいまだ唯物弁証法を主張するものはなかった。

(1) ヴエーラーは満82歳の死に至るまでゲティゲン (Göttingen) 大学教授として約50年のあいだ大いにその業績を發揮した。

うえのごとき自然科学における唯物機械論的傾向の影響として社会科学方面では、ブハーリンの史的唯物論 (機械論) が成立し、また自然科学的な機械論と調和する社会学としての現実社会学 (Realsoziologie) (社会過程論) とうえの調和のない社会学としての文化社会学を認める二元論が生れた。

また1895年にオストヴァルト (Ostwald) —— オズワルド (Oswald) とは別人 —— は不変的実体としての物質を排し、不変的実体としてのエネルギーを認めたが、これは古典物理学において単なる実験上の原理であるエネルギー不滅を形而上学に移すもので、機械論ではあるが、唯物論と区別されるエネルギーティック (Energetik, エネルギー論) を主張する。このエネルギー論は社会科学に應用され、社会のなすエネルギー節約努力に反抗しようとする、人間の先天的気質の徴表としての犯罪を認め、良心の自由を否定する学説を生じた。なおカントの批判主義にも、ヘーゲルの観念論にも、自然科学的唯物論にも満足しえないひとびとの間に実証主義 (positivism)¹⁾ と1910年台における、ラッスル新实在論 (the new realism of Russel)²⁾ との隆盛を招いた。しかし、ブハーリンの史的唯物論を含む、自然科学

学外における上述の諸見解は前・量子論的としての意義を持つのみである。³⁾

(1) 実際の経験的事実を重んじ、それ以上を全く不可知であるとして取扱わない。

(2) ラッセルなどの新实在論によれば、理性経験と区別される知覚経験はカントのいう「とき現象ではなく、客観的实在の認識であるとして、中性的 (neutral) なもの实在を主張する。

(3) エネルギー散逸の原則(= エントロピー増大の原則= 熱力学の第2法則)も量子論的な微視現象については絶対的ではない。

しかるに今世紀に入り、1900年に量子論がまずエネルギー量子論としてプランク (Planck) によって主張された。自然科学の対象として窮極的なものは従来、物質と放射であり、放射 (フク射 radiation, Strahlung) とは振動体 (vibrator) たる物質 (matter, Materie) から放出 (射出 emission, Aussendung) されるエネルギーであり、熱線・光(いわゆる可視光線)・紫外線・X線・ γ 線・宇宙線などをいう。これらは従来、波動として一元的に説明されて来た。しかるにプランクは熱(赤外線)放射を説明するため「放射の放出」(Ausendung von Strahlung)と放射の吸収 (Absorption) は不連続的 (diskontinuierlich) な一定量をもつてするとの理論を主張して、この説を作用素量子仮説 (Hypothese des elementaren Wirkungsquantums) と称した。²⁾ エネルギー量子の主張である。この考えはエネルギーそのものの構造をも粒子と見ることを含んでいるが、この含みを表現するに至らなかつたのはエネルギー電滋波説に対する遠慮であった。エネルギーそのものを粒子と見なすこの考えの一部を光について1905年アインシュタインは光子量子仮説として発表し、光電効果の説明に用いたが、光子量子仮説の最も有力な証明は1923年におけるカムトゥン (Compton) によるカムトゥン効果の発見であった。³⁾

(1) Ahur Haas, Das Naturbild der neuen Physik, 3. Aufl., S. 53.

(2) A. Haas, a. a. O., S. 55.

(3) The so-called Compton Effect—光の他の放射が微粒子に当り、その方向を変えられ、不規則になつて散乱 (dispersion, Zerstreung)

というが、X線が軽い元素原子に当って散乱されるのを見ると、X線の波長が散乱されて増し、(振動数が減る)ことが知られる。これいわずにカムトゥン効果である。この場合の振動数の増減は電磁説では説明できない。これを光について云えば、今日では光の反射・屈折などの場合は粒子として説明せられるが、光が水面に浮いた油のごとき薄膜に当るとき、美しい干渉色(Interference colours)を呈し、また光が毛のような細いスキを通るとき回折を示し、これらの場合には光は波動として働くと今日もなお考えられる。

ついで1924年ブローイ(Broglie)は物質波仮説によって、つねに粒子だと考えられていた物質についてそれらは振動体たる粒子と考えられるのは関与物体が大なるときであり、原子大以下の小構造に關して波動と考えられることを理論的に主張し、この仮説は1927年デイヴィソン(Davison)、ジャーマー(Gerner)両氏が電子の回折(diffraction, Beugung)を発見したことによって証明された。

(1) Davison, Gerner 両氏の発見したのは電子が、X線と同様に、ニッケル結晶内の原子群に当ると回折をおこすことである。

かくて今世紀に入つて量子論の發展により、エネルギー量子の仮説と物質波仮説が証明されて粒子性と波動性の矛盾が主張され、さらに1924年の不確定性原理とそれに基づく1931年における補足性原理が強調され、カントの因果律は崩壊したが、カントの不可知論は科学的に裏書きされた。なお量子論の対象は古典物理学のそれよりもいっそう徹視的な世界であることは、上述のごとき意味であるから、ボーアがこの点に基づいて、生物学的ないし心理学的過程に物理学的方法を徹底的に用いるとき²⁾、観測手段の観測対象への影響により生物の死を招くから、生物学的ないし心理学記述と物理学的方法とは補足関係にあると主張したのは、わが田辺博士も賛成するところである。上述の不確定性原理によって「徹視的」世界における機械論的因果の崩壊が確定的となった。機械論のうけたこの打撃とボーアによる心理学記述についてのうえの補足関係の主張は分子的行動を対象とする従来の行動主義心理学に代つてモル的行動を対象とする新行動主義心理学をデビューせしめることとなった。

- (1) 自著、王冠の政治学的意義（8版）、34頁。
(2) 量子論のもとにおける徹底的研究では分子的行動以上の「徹視的」行動にまでメスをいれることを要求するであろう。

うえの量子論的自然科学において1931年の補足性原理成立に至るまでの時期とこの成立いこの時期とは区別すべきであり、前の時期は「原・量子論的」であり、後の時期は「後・量子論的」である。しかれば前の時期においてマルクス主義が量子論の影響を受けて「自然弁証法」の延長として唯物弁証法史観を認め、従来の唯物機械論を修正するのは、原・量子論的意義を持ち、その点においてそれまでのマルクス主義に一步を進めている。しかしこの弁証法史観もこの原・量子論的意義を持つのみである。何となればマルクス主義の認める2つの真理 (two truths) —— 素朴実在論と1種の形而上学的弁証法の2つのドグマ—— は1931年の補足性原理とうえの不確定性原理によって純理論的にはくずはてたからである。

- (1) 物理学では、運動する物体は同一瞬間においてある場所に存在するとともに、その場所に存在しないという矛盾が古来、認められていたが、不確定性原理によってこの矛盾が認められないこととなった。

しかれば最後に、後・量子論的意義ある政治学として弁証法の実存主義と形式論理の正統政治学の優劣を問うべく、実存主義政治学の代表として田辺博士の主戦論¹⁾（以下、単に実存主義という）をとり、正統政治学の代表としてアリストテレスの、進化論的宗教を基礎とする政治学をとる。

- (1) 自著、アリストテレスの進化論的宗教、95頁に紹介。

うえの実存主義では、ボーアの、心理学的記述に関する補足関係の考えから、ボーアの物理学的補足性原理がその背後に認める Ding an sich について、物理学的方法が否定されているが、これはよしとするも、うえの実存主義が新行動主義の心理学を無視するのは早計である。何となればこの新行動主義は物理学的方法を離れてモルの行動を対象

とする意識ある心理学であるから。むしろ一口に新行動主義心理学というともマクドゥーガル (McDougall¹⁾) のそれは環境をまったく軽視して個体を偏重し、新行動主義のゲシュタルト心理学²⁾ は個体と環境の双方をひとしく尊んだが、環境を単に行動的環境に限定しそのため、全体主義に陥るが、わたくしはそれらの極端な個人主義または全体主義を言うのではない。

(1) ② 自著、王冠の政治学的意義(8版) 30—32頁。

わたくしがここに問題とするのはトウルマン (Tolman)³⁾、ハル (Hull) によって代表される、地理的環境をも重んじる新行動主義の心理学であり、そこには個人の自律が認められる。しかもこの自律は深層心理学¹⁾——一種の意識なき心理学ではあるが、行動主義心理学とは区別される——たるユング (Jung) の精神分析学によって裏書きされるとき、道徳的自律となる。アリストテレスのうへの政治学は最も進んだ心理学原理たるこの、個人の道徳的自律によって裏書きされ、更にクラポトキン (Kropotkin) や最近の群集生態学 (synecology) の認める相互扶助などによって付けせられる。また超心理学 (parapsychology) の将来の進歩による裏書きにも期待しえないことはない²⁾。また物理学上において絶対を4次元空間のそとに認める科学者もある³⁾。

(1) 自著、アリストテレスの進化論的宗教、ii頁、iii頁。

(2) 超心理学は psi ability として GESP (clairvoyance, ESP と telepathy) と PK の2を認める。うへのうへ ESP は他の動物にも存するものが人間にて退化しており、女子および若年者において比較的すぐれているが、これと区別せられる telepathy (以心伝心) の研究は PK 研究とともにまだ甚だしく幼稚である。telepathy と PK の研究発達に本文の裏書きを期待する。

(3) エーテルの絶対静止を裏書きしようとする Michelson, Moley の実験が失敗したのち、アインシュタインの光子仮説でこの絶対静止が否定されることとなり、ミンコフスキ (Minkowski) はこの時空の相対性を4次元をもって説明した。しからば絶対は物理学によって認められないかというに、ジーンズはリャトーンやマウズスティームスに見る、時と宇宙の同時創造の思想に物理学的説明を与え (Jeans, Mysterious

Universe) / ムンデル教授 (Prof. Henk) はネーヘンとは相対的なる業力 (時空) の制約を受けない絶対であると云っている。しかるに業感縁起を越えたこの、小乗のネーヘンは大乗ではラヤ縁起の世界と純化されている。化生は astral body ではなく、遣伝因子その他の物質を有せず、放射のみによるエネルギー代謝を行う生物 (衆生) であり (ア・バーリン、自然発生説参照)、菩薩を最高とし、絶対者は無量寿、無量光として、ミンコンスキイ世界の制約外にあるも、大勢・至を報身とし、観音を化身とし、ミンコンスキイ世界を法身とする。

なお上の実存主義が形而上学的存在としての宇宙精神を認めるのは理解されるが、それがため全体主義に陥り、個性の絶対尊厳を忘れたことと形而上学的弁証法としての実存主義弁証法を認めたことは一種の独断であり、この独断はモルの行動を対象とする新行動主義心理学についての無理解に発するものではなからうかと考える。¹⁾

(1) なお実存主義政治学の母胎となった個人主義的実存主義は純粹経験 (reine Erfahrung) の名によって広義の経験的判断 (empirisches Urteil) —— 経験 [判断] (Erfahrungsurteil) すなわち普通にいふ、または自然科学者のいふ経験 (experience, Erfahrung) と知覚 [判断] (Wahrnehmungsurteil; perception, perceptive judgment) との区別——より以前の概念的判断 (conceptive j.) —— 判断と同一知覚判断と区別される——を意味せしめ、この意味の独断的——後・量子論的ではあるが、超・心理学的、超・生物学的である——主張により「一種の、形而上学的唯我主義 (solipsism) を強調する。うその用語例に反マッハ (Mach) は純粹経験の称によって感覚 (sensation, Empfindung) を意味せしめている。うその「超・心理学」とは「超心理学」(parapsychology) ではなく、「超・心理学的、超・生物学的」とは超心理学を含めていふその心理学をいふその生物学とともに超越するといふ意味の後・量子論的態度——前述の実存主義政治学の態度——を意味する。